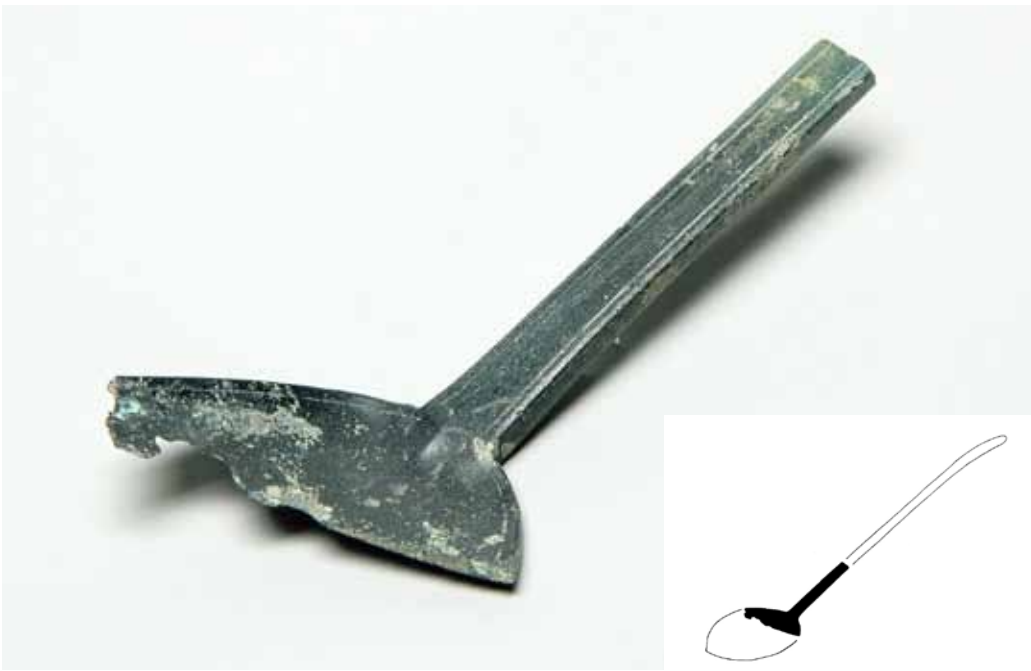


# 太宰府の文化財

304

## 佐波理の匙 (スプーン)

大宰府条坊跡出土 奈良時代



▲匙の先と持ち手の部分が折れていて、現状では全長 7.6cm ですが、本来は、匙部分が 6～7 cm、持ち手部分が 18～19cm で、全長 24～26cm ほどだったと考えられます。

今回紹介するのは、青銅でできた匙です。昨年発掘調査を行った大宰府条坊跡第277次調査(西鉄二日市停車場跡地内)から出土しました。佐波理とは、青銅(銅と錫の合金)のうちでも錫が高い割合で含まれるものの呼び名の一つです。九州国立博物館の協力で蛍光X線分析(※)を行った結果、この匙も銅に對し高い割合で錫が含まれることが判明しました。

奈良東大寺の正倉院には、匙を含むたくさんの佐波理製品が伝えられていて、これらの佐波理製品のほとんどは、奈良時代に朝鮮半島の新羅(統一新羅)から輸入されたものです。7世紀から8世紀ごろ、新羅では佐波理製品が作られていたことが知られています。青銅製品は錫を多く含むと割れやすく、加工が難しくなります。こうした佐波理製品は、当時の新羅の高い技術水準を示す資料でもありません。「佐波理」は韓国語で器を意味する「サバル」が語源と考えられ、当時、「佐波理」と

は新羅で作られた青銅製品を意味していたのかもしれない。

この匙を正倉院事務所へ持って行き、正倉院所蔵の佐波理匙と比較検討を行ったところ、出土した匙と正倉院の匙が、そっくり同じ形だと判りました。この匙が新羅で作られたものであることが断定できそうです。

青銅の匙の出土は、日本国内ではわずか10例余りのほか、韓国でも有力者の墓や王宮跡に限られることから、特別な品であったと推測されます。この佐波理の匙が、どのような経緯でここ太宰府に運ばれてきたのか、また、匙が出土した場所にどういった意味があるのか、一体誰が、どう使っていたのかなど、さまざまな関心が湧いてきます。

匙が出土した大宰府条坊跡第277次調査地点は、大宰府政庁の南約1km、古代の都市区画である大宰府条坊のほぼ中央にあり、条坊のメインストリートである朱雀大路の東側に面したところに位置し

ます。当時、日本へは新羅からの使節が度々往来し、大宰府にも訪れていました。朱雀大路は外国の使節が大宰府政庁へ向かう際に必ず通る道ですから、ここで新羅の人々のやりとりがあったことも考えられますし、ひよっとすると、この佐波理の匙を使って食事をしていただけたかもしれません。現在も発掘調査は継続中で、周辺の調査成果と併せて現在検討中ですので、今後の報告を楽しみにお待ちください。

文化財課 遠藤 茜

※X線照射により物質の元素組成を同定する分析方法



▲大宰府条坊跡第 277 次調査地点